平成 26 年度　第 1 回　平塚市博物館協議会　会議録

■開催日時　平成 26 年 5 月 29 日（木）10 時～12 時
■開催場所　平塚市博物館　特別研究室
■会議出席者（敬称略）
　会　長　　宮川重信
　副会長　　石綿進一
　委　員　　宮澤達寛、椿田有希子、岡部盛敏、牧野久実
　事務局　　澤村館長、縣館長代理（管理担当長）、栗山館長代理（学芸担当長）
■傍聴者　なし
■会議の概要
　１　開　会
　２　博物館職員、協議会委員の紹介
　３　会長及び副会長の選出
　　会　長　宮川重信
　　副会長　石綿進一
　４　議　事
　（１）事業報告（春期特別展、こどもフェスタ 2014 等）
　（２）今後の事業について
　（３）博物館の課題（会員制行事のありかた）について
　（４）その他
■議事および質疑
議題(1)　事業報告（春期特別展、こどもフェスタ 2014 等）
　平成 25 年度春期特別展「水と生きる里　金目の風土とその魅力」、平成 26 年度「博物館こどもフェスタ 2014」の開催結果について、事務局栗山学芸担当長が協議会説明資料により説明。
委　員　　ちょうど特別展の会期中に、君の次の勤務先は金目だよと内示をいただいて、平塚や金目について良く知らない私のためにあるような特別展ということで、目を皿のようにして見ました。一つ一つ大変興味深い中身が事細かに展示されていて、あのエリアの中にものすごい情報量があったなと思いました。これだけの収集や、皆さんの英知を集めて分かりやすいビジュアルな展示にするには、かなりの労力がいったのではないか、企画展に至るまでの準備・検討の期間を含めると、ものすごい企画展だったのではないかな、と想像しています。皆さんのご努力に改めて敬意を表したいと思います。
　中身は、私にとってタイムリーな内容で得るものが多かったのですが、実際に学校へ行きますと、この話題が子どもたちや教職員に今ひとつ浸透していなかったな、という実感が残っています。もったいないな、何で金目のことをやっているのに、金目の子どもたちは知らないのだと思いました。これからの時代を生きていく子どもたちに、金目のことをしっかりと学んでほしいなという思いから、もっと学校への浸透があっても良かったのではないかと感じました。ただ公民館だよりやチラシが配られるだけではだめだな、と思いました。私は赴任直後で具体的な取り組みができなかったのですが、特別展の準備・構想段階から、学校現場の子どもたちや教職員にＰＲなりイベントのお知らせなり、学校を巻き込む形をとっていただけると、春休みやゴールデンウィークの期間に、子どもたちが出かける機会は十分あったと思います。そういう意味で、金目の子どもたちが足を運ぶ機会があっても良かったなと思っています。「エコミュージアム金目まるごと博物館」で活動していらっしゃる方々の頑張りに、ちょっと偏ってしまった感があるのかもしれません。金目地域で、エコミュージアムを核として、公民館やさまざまな地域の関係団体とともに地域を盛り上げていく力があると、もっと金目の皆さんに参加していただくような、主体的に足を運んでいただけるような企画展になったのではないかと思っています。それが全体的なこととして言えることかなと思い

ます。

地域への愛着、誇りや自負というものが、金目の方々は強いものがあるというのが、着任して数か月の私の感想です。そういうところに、タイムリーに開かれた企画展は、数だけではなく、いろいろな意味で、地元へのインパクト、人々の心への印象が高いものがあったのではないかと思います。お礼とともに、ご苦労様でしたと申し上げたいと思います。ありがとうございます。

事務局　金目のエコミュージアムの方は常日頃から何年も活動されていて、持っている情報・人脈も豊富です。

お子さんへのアピールの点では、関連行事のなかで、生き物観察会、子ども自然観察会やクイズラリーなど、とくにクイズラリーでは小学生の参加が多いうえに、地元の中学生もスタッフとして頑張ってくれまして、地元の小・中学生を巻き込んでいこうとの思いはあったと思います。

一方、全市的ＰＲとしてもう少し博物館のできることがあったかなと思います。ＰＲが不足しているというのは、ここ何年か言われていることですので、また改めてＰＲの方法、どういう方向にアピールしていくのかということを、今後とも改善していきたいと思っています。

委　員　博物館と学校との連携について前々から興味を持っていたのですが、同じ教育現場に携わりながら、お互いの理解がなかなか深まらないというのが、どこの博物館でも現状だと思います。例えば、年間に２・３回、学校の先生を対象の説明会を開いたり、学芸員が地域の学校を全部回って、こういうことをやっているので、こういう学習と連携させて何かできませんか、と紹介して回るというようなことを、何かやっていらっしゃいますか。

事務局　学校の先生の研究会から、地域の見方ということで講師を頼まれることがありまして、積極的に行ってお話をしています。また、小学校の６年生の総合学習などで、地域をテーマに取り上げて何かやりたい、という相談にも積極的に応じています。

こちらから回るということになりますと、小学校だけで 28 校ありまして、全校からお願いしますとなると、パンクしてしまうということで、ちょっと踏み出せないところもあります。

委　員　金目は昔から文化的に発達した地域だと思います。小学生の校外活動などの機会に、こちらから学校の先生に働きかけて、例えば、今の生活とつながるような昔の人の知恵や暮らしを教えてみたりするのも一つのやり方だと思います。金目であれば行事のなかで行うとか、また金目だけに限らず、地域や学校に「いかがでしょうか」と協力をお願いして、ひと声でも参加を呼びかけてもらうと効果的だと思うのですが。

会　長　博物館から行事について、まず校長会や公民館などに呼びかけると思うのですが、学校にも子どもたちに関係する催しなどの呼びかけがいっぱい来ます。それらについて、学校側が子どもたちに今必要かどうかということで選ぶ場合、先生の興味などがかなり影響しているように思います。金目などは公民館がこうした企画の展示を一過性ではなく、継続した形で行っているので、逆にこの期間に来なくても、そこで子どもたちは勉強して郷土に興味を持つ機会があるわけです。むしろ子どもというより、先生に興味を持ってもらうことのほうが難しい課題のように思います。

委　員　知ること、見ることだけが大切なだけではなくて、郷土や人のつながりをだいじにして育っていくことが子どもには一番大切なので、そのために博物館の資料をいかに活かすかということだと思います。

委　員　意見というより要望に近いのですが、今後、ほかの地域でも検討していただけるように、ぜひお願いしたいと思います。前協議会の展示解説の際に、自然が残っている地域という点で金目の地域以外は厳しいかもしれない、と伺ったように思うのですが、それ以外の地域でも歴史や文化がありますし、例えば旭地区なども開発が進んで今は自然が残っていないかもしれませんが、昔の姿はどうだったのか、昔はこういう形で自然が残っていた、都市化が進んでこんなふうに変遷していったとか、旭地区だけをとっても知りたいことがあります。全部の地区では大変かもしれませんが、いろいろな地区で同じような取り組みをしていただけると、市民としてとてもありがたいかなと思います。

委　員　それは良いと思いますよ。松原地区でも「松原」という地名などをとりあげた講義があって、結

構、人が集まっていました。ああいうテーマには興味があるのかなと思いました。

委　員　　市民と一緒に活動してつくり上げていくのは、特にこうした市などの博物館の使命だと思います。非常に努力されていることは良く分かります。ある分野のプロが、ここまで市民の興味をまとめて、図録一つ作るにも、えらい時間と労力がかかると思います。展示もそうですね。私が最初に協議会委員になった時には、学芸員は研究の時間をもう少しとったらどうですか、という感覚が強かったのですが、それぞれの博物館の設立目的などの条件が違うと思いますので、それぞれ努力されているので、良いものができているのだろうなと思います。ＰＲ活動などで押し切れなかった点もあるかもしれませんが、全体的に見て一生懸命努力して良くやっていると思います。学芸員の人数が少ない割に、目いっぱい働いているように思います。結構大変だなぁと、私の経験では、そのように感じています。

議題(2)　今後の事業について

夏期特別展「ぼくたちはひとりぼっち？　～地球の外に生命を探して」、文化ゾーン３館コラボの事業、夏期の各種行事、寄贈品コーナーの展示などについて、事務局栗山学芸担当長が協議会説明資料により説明。

委　員　　関連事業で、夏休みなのに土・日の設定が多いのは、子どもだけで来るという想定でなくて、親御さんと一緒に来ることを想定しているのでしょうか。安全面から、子どもだけでは来てはいけないというようなことでしょうか。

事務局　　関連事業の連続講演会などは年齢の高い世代をターゲットとしていて、やはり子どもさんだけでは難しいかなということで土・日にしています。

委　員　　夏の行事予定で、寄贈品コーナーの考古学のタイトルは、やはり難しいですね。「平塚の緑色の茶碗」とか、そういうわけにはいかないですね。

事務局　　これからの事業ですので考えます。やはり緑釉陶器は専門用語ですので、サブタイトルで工夫するなど、やわらかくしたほうが良いかもしれません。

会　長　　易しく言うのは難しいですね。

委　員　　学生に生物を教えるにも、検索表の分類のキーは専門用語ですので、学生はいっぺんに頭が真っ白になるのですね。環境省で、一般の人々にも分かってもらいたいということで、絵解き検索というものを作ったのですが、そこに係るのがみなプロですから、こうした専門用語が出てきてしまい、試験的に使っていますが、やっぱりだめなんですね。これを何とかしないと打破できないのですね。専門家がもう少し踏み込んで、くだけた表現を取り入れながらも、専門的に大丈夫なものを作らなくてはならないと思います。

委　員　　歴史分野の展示などでも、専門では当たり前の言葉なので、当たり前のようにそのまま難しい言葉を使ってしまいます。ただ、言い換えようとするとどうしたら良いのか分からない。ご苦労はすごく分かりますが、そこを一歩踏み越えて、大人に情報が足りないものにならないよう、かつ、子どもが読んでも分かるように作らなくてはいけないなと痛感しています。

事務局　　用語の問題というのは解説文などにもいろいろ問題が出てきますし、また指摘もいただいているところです。我々も決して考えていないわけではないのですが、易しい言葉を使おうとすると、今度は正確性が失われる危険性があって足がすくんでしまうのだと思います。学術的に使われている用語は、定義されて意味が保証されていますが、そうではない言葉を使った場合、誤解を生む可能性があると思います。そこを覚悟してやらないとできないのだろうなと。それはまた、意外なことを言っているのではないか、といったお叱りを覚悟してやらないといけないのかなと。我々なりに、組織でこういうことをやっていこうと考えながら、合意のもとにやっていかないと難しいのかなと思います。検討課題にしていかないといけないと思います。ありがとうございました。

委　員　　夏期特別展ですが、子どもが興味を持つような、という意味で、平塚ですから、七夕に関係する星のことを、ちょっと入れたらどうかなと思うのですが。昔話など、絵本の読み聞かせの事業のなかででも。

委　員　　展示の特徴で小学生低学年にも対応するというのがポイントかな、と思いました。小学生が発達段階的に上がって 5・6 年生になると、結構大人どうしの会話が成立します。その後、ポーンと１

年生のところに行きますと、今まで使っていた言葉がほとんど通じない世界になります。そのギャップを埋めるのがとても難しくて、よく、低学年だと易しくていいでしょう、可愛くていいでしょうと言われますが、実は低学年はすごく難しいのですね。中学生・高校生を相手にする授業のほうが楽なのですね。私たちがふだん使っている言葉がほぼ通じますから。それをいかに噛み砕いてイメージが分かるように咀嚼して伝えるか、すごく難しいのですね。なので、かなり苦労されるのではないかなと。

低学年にも分かるようにという意識をあまり持ちすぎると、逆に、先ほど館長がおっしゃったように、本来伝えなくてはいけない肝心な正確な部分が伝わらなくなってしまう場合があるのではないかなと。低学年の子どもたちは保護者と一緒に来ますので、親が解説するということもあって良いかなと思います。あまり噛み砕きすぎて苦労されないほうが良いのではと思います。ただ、キャラクターを駆使したり、吹き出し風にしてストーリー性のある、誘いのある展示にしていただければ、興味を持ってもらえると思いますので、そうした面でのアプローチの工夫をしていただければと思います。

議題(3)　博物館の課題について（会員制行事のあり方など）

博物館の課題として、会員制行事のあり方などについて、澤村館長が協議会説明資料により説明。

会　長　　これまで、博物館のいろいろな分野の会の研究があるのは、市民の方が自分の興味があってサークル的に集まって、自分たちの嗜好（志向？）や自分たちの目標、自分たちの楽しみ、自分たちの勉強としてやっているのだろうな、と思っていたのですが、今のお話では、博物館の個々の活動の細部に、そういう人たちが下働きのような形で入って活動しているサークル、ということなのでしょうか。私も博物館で活動している方の話を聞くことがあるのですが、現役を退いた年代の人が、自分がやってみようと思った時に、人を介したり、あるいは「あなたと博物館」などを見たり、各会の行事の時に来たりして、活動してきているのか、その辺が分からなかったのですが。今、そうした参加型の行事や会員制行事の傾向が変化して、博物館の事業活動を活発にやっていくために弊害が出てきたのが見えた、ということだと思うのですが、それは具体的にどのような弊害が見えたのでしょうか。だから、こうして今、転換しよう、考えてみようということになったのだろうと思うのですが。どうも分からないことばかりで。

事務局　　今、ご懸念をいただいた点ですが、もちろん市民の方々には、それぞれの興味・関心に従って参加していただいています。それに沿って我々も進めているのですが、その会の教育内容の中で、実際に調べてみようという調査体験をしていって､その結果は博物館の研究成果として利用していく、博物館の調査成果となっていくということになります。つまり、参加する市民の方々の興味・関心と、博物館が狙いとする調査・研究とが一致した形でやっているということです。今日は、博物館の運営について伺うという趣旨でお話をさせていただきましたので、博物館の側からの一方的な視点のお話になってしまいましたが、当然、行事としては、参加する市民・会員の方々の興味・関心に応えていくというのが重要な要素です。最も大切にしなければならない要素であることはもちろんです。当然、それが一致しているからこそ、今までの行事運営ができて成果も上がってきたわけです。今、何か問題が起きていますか、ということですが、現状でそんなに大きな問題が起きていることではありません。ただ、あくまでも、今の運営で破綻が起きてしまってからでは遅いので、このまま行くと五年後にはどうなるか、十年後にはどうなるかという予測のもとに、きちんとした循環を回復しておく必要があると思います。そうした観点から、こうして課題を考えていく必要があると考えています。

会　長　　博物館でなくても、どこの会でも高齢化、人数の減少傾向に対して早く手を打つ必要があると思います。自分たちの活動を発表したり展示したり、冊子にまとめたりすることが、博物館の調査・研究活動ともマッチしていることは良いと思いますが、一方で、会員の人数の減少ということの原因にはいろいろあると思います。会員が、そうした活動に係ることが大変だと思うようになっているのかどうか。例えば、体力的な面や内容的な面、あるいは会の活動費の面などで、そういう声があるのかどうか。博物館の調査活動の一端を担うような活動をしている会員さんについては、報酬

というのはまったく関係は無いですよね。

事務局　ケースバイケースで、内容によっては、お礼をお支払いしている場合もあります。

会　長　新しい会員を募集したり、新しい会を始める時に、その眼目の根底として、本人の興味・関心や意欲を誘うようにすると思うのですが、会に入ってはみたけれど実は、というようなことは無いのでしょうけれども。その辺が分からなかったので伺ってみたのですが。

委　員　たぶん高齢化だけではなく、日本の社会にありがちだと思うのですが、固定化することの良い面がある一方、新しい人がなかなか入って来づらいという弊害も出てくるわけですね。そういう意味で、将来的なことを考え、新しいグループもぜひ作っていきたいということだと思います。その前に一つ、会員制行事の回数の割合や比を出すことなのですが、実数としてもやはり減っているということでしょうか。

事務局　実数はさほど減っていません。

委　員　なるほど。いや、これは自分の首をしめることになるのではないかなと。今後、３割とか５割という数字を出すとなると、ちょっと気をつけたほうが良いのではないかなと思います。それとは別に、館長さんのおっしゃるように、今後のことを考えるとなると、新しいグループを作るような基盤は作っていかなければならないと思います。今日の最初の事業報告で、金目まるごと博物館のチームで、中学生・小学生でずいぶん活動していた方が大勢いたということで、もうそういう芽吹きのようなものを感じるのですが。いかに具体的なチームを作っていくか、ですよね。若者組のようなものをどんどん作っていくというのは、ぜひやったほうが良いと思うのですが。例えば職業インターシップなどは、こちらの博物館ではやっていましたか。職業体験として、こういう活動に係っていくことが自分の将来につながる、という意識を持った若者たちや児童たちが、自発的にグループを作るようなことが芽生えてきたら良いかなと思います。既存のチームに入るというのは、日本の縦社会のなかでは自分の意見がなかなか言えないので、うまく行かない面があるかもしれません。今までのチームは今までのチームとして、これまで通りやっていただいて、新しいところをどうやって作っていくかということがすごく大事だと思います。

委　員　気になるのは、数値目標が上がっているところは相当大変ではないかなと思います。先のお話のように首をしめてしまうのではないかと。注意したほうが良いと思います。気持ちとしては分かるのですが、もう少し表現をやわらかくしないと、これどうなったのですか、ということになりますので注意したほうが良いと思います。あとはやはり、どうやって若返らせるか、どこでも既存のグループが悩んでいるところだと思います。利用者も活動する人も少なくなっているなかで、どこでも抱えている問題だと思います。何とも言えないところですね。

委　員　とくに若い人を呼び込むということですと、ご承知の通り、現役世代は平日は厳しいので、土・日でないと難しいということがあります。で、土・日ということでお考えなのでしょうか。あと、会員制行事への応募機会が年に１回に限られてしまうというのは、どういう理由なのでしょうか。

事務局　会員制行事の応募機会は年１回しかないというのは、年度の初めに、会員になりませんかという募集があって会員になります。例えば６月に会員になりたいと思っても募集はしていない、積み上げる形での会のガイダンスを受けられない、ということになります。実際には３月に募集しますので、３月に思い立たないと会員になれないという問題点があります。

委　員　そこの間口をもう少し広げることは難しいですか。会の運営上、やはり積み上げがないと話に付いていけないというような。

事務局　それは会のやり方の話になりますが、現状では会の活動内容によって、それが可能な会と、そうではない会があるという状態です。

委　員　教育普及活動が学芸員の研究活動の邪魔にならないようにということだったのですが、例えば、会員制行事にずっと参加されてきたベテランの方のノウハウを活かさない手はないという気がします。そういう方に、毎回参加型の行事のインストラクターの形でやっていただけば、学芸員の方の負担も若干少なくなるかもしれないですし、今まで参加してきた方のノウハウも活かすことができるのではという感想を持ったのですが。

事務局　今のご意見は、会員制行事の運営をベテラン会員に活躍していただくことで、館の職員の負担を減らして、その力をまた他の行事に向けていくことが可能なのではないかということでしょうか。ありがとうございます。

委　員　毎回の行事をすべて学芸員の負担にしなくても、ベテランの方々の知識・ノウハウを活かすことができないかなということです。

事務局　毎回の行事にも、それが利用できるのではということですね。

委　員　毎回というか、１回限りの(参加型の)行事ということですね。

事務局　参考になるご意見をいただいて、ありがとうございます。会員制行事に来られている方は、先ほどのお話にでも出てきましたように、それぞれ、ご自分が新しい知識を得たいという興味・関心で参加なさっているので、それを今度は指導や展示とか、ほかの普及的なことに向けていただくというのは、その方の考え方を転換していただく必要が出てくると思います。やってみて、うまくいくかどうか検討が必要かと思いますが、トライする意義があると思います。ありがとうございます。

委　員　そこはもちろん、いざインストラクターとなると、腰が引ける方もいらっしゃると思いますので、やっても良いという方が少しでもいらっしゃるならば、ということで。

委　員　分野によって若い人が入っている会もあると思いますが、現役世代は時間的にもなかなか入れないと思うので、土・日を活用しないと難しいのではと思います。あとは、公民館活動などの場で、会員が説明して仲間を募る、会に引き込む、といった活動をやっていくのも良いとは思うのですが、なかなか難しいですね。

事務局　石仏を調べる会では、一般向けに石仏を見学する会を行って、会員の方々にスタッフとして活躍していただくということを試み始めたようです。民俗探訪会の方々のなかには指導してくださる方はいらっしゃいますか。

委　員　民俗探訪会は、石仏という一つのテーマでずっと探して調査するということではなくて、その都度、地域の行事に出かけて調査しています。関心のある方ならば、みんなと一緒に歩いていれば分かるというような感じです。ほかの分野の会では、改めて予備知識など勉強してから取りかからないと難しいというところもあるかもしれませんが、とくにインストラクターがなくても自然と吸収できる会もあると思います。

会　長　例えば石仏などは、全国的にさまざま行われているように、調査ではなくて、石仏の顔や形、雰囲気を見ながら楽しむ人は大勢いますよね。もちろん、そういう会があって良いのですが、博物館が意図する会は、やはり目標があって調査をしてまとめていく会というようなものですよね。

公民館にも古文書の会がありまして、博物館の古文書を調べる会の会員も、公民館の大勢の方たちと一緒にやっています。公民館の方は、例えば旅先で見る古文書なども少しでも読めるようになればと、最終的に何かの形にすることはないのですけれど、みんなで集まって、ああ分かった、というような形でやっています。そういう方たちが、その後、それぞれ博物館に来て、会員として活躍するようになると良いと思います。

古文書に限らず、歴史でも何でも、こういうことをやってみたい、ふれてみたいという人は大勢いると思うので、とっかかりとして、募集や最初の活動などで、ワッーというようなものがあると良いと思います。初めから博物館の調査のお手伝いの会員、ということではなくて、これまでの自分の興味・関心を満足させるようなものが会に入る時にあると、皆さん、入りやすいし集まるし、会そのものも活気が出るのではないかと思います。博物館の会員の一人一人から、こんな楽しいことをやっているんだ、という声がもっと出るようになれば、盛り上がりはあると思います。これは博物館だけでなく、会と名が付くものの存続や発展に係わる問題だと思います。こうして、いろいろ考えながら試行錯誤してやっていけば必ず良くなると思うのですが。

委　員　基礎知識が無くても、ちょっと興味がある人なら、例えば、“平塚の城館遺跡を見る”といったテーマなどで一日の行事を設ければ、結構集まると思います。会員制行事のほうは、これまで通り、発表まで持っていくという形でやって、それが難しい人には、一日の形式の行事をやって、そこに会員がインストラクターのような形でついていく、というのであれば、できると思うのですが。

事務局　ありがとうございます。

先ほどの、現役世代は土・日でないと参加できないと思われるがどうなのかとのご質問ですが、現実的に土・日は開催のための館内のキャパシティがいっぱいで、土・日に新しい行事をやるのが難しくなってきています。今いただいたご指摘・ご意見を活かすには、現状でやっている土・日の行事と平日の行事を含めて、この行事はこれからどういう層を対象にしていくのかということをもう一回きちんと再編成していって、開催日を割り振っていくことも必要なのかなということに気づかせていただきました。

委　員　あと、先ほどの職業的なインターンシップで学生さんを活用して、土・日で一日体験をするとなると、学芸員の先生方の負担が大きくなるのがちょっと問題かなと思います。趣旨は良いと思います。

委　員　夏休みをうまく使うと良いのですが、夏休みのイベントは親子連れを設定されているのですね。それを子どもだけの日程にして、子どもだけを動かすというイベントを組むことによって、そうしたことの糸口にならないかなと思ったのですが。これは、目標として 27 年度中に何かしなければいけないのでしたか。

事務局　実際には 26 年度に、天文部門ではそれを考えて事業を組んでくれていまして、その一環として、子ども連れ対象の行事を考えています。

委　員　やみくもに毎回参加型の行事をどんどん増やしていくとなると、学芸員さんの負担が大変になってしまうので、今あることをちょっと変えることで、そういうことの糸口にできるような、そういうものを増やすほうが、まずは良いのかもしれないと思います。なかなか、ベテランに任せてと言っても、学芸員さんの目配りがどうしても必要になっていて、任せきりにすると破綻をきたすようなことも出てくるかもしれません。大学生をうまく活用して、若手をどんどん入れていくという何か新しい仕組みを作っていく可能性はありかなと思います。

会　長　さまざまな意見があって、これだというのはなかなか出ませんが、これから 26 年度・27 年度に向かって、より良い方法を模索しながら進めていていただきたいなと思います。

委　員　小学校の一つの現状をお話しますと、今のような話としまして、子どもたちの現状もそうなのですが、興味・関心の裾野を広げ、どんどん開拓していくことが難しい状況にあります。子ども同士で川に行ってはいけないという校則があり、それは地域からの要望としてあります。学校で縛ってほしいと。子どもたちの手足をもいでおいて、興味・関心を高めなさいと言うのは、大人の身勝手な発想でもあるかなと。

一方では、子どもたちの命の安全や防犯のために、子どもが遊ぶ公園の緑を伐採して、神社に行かないと森が無い状況です。子どもたちの周りに、土に触れる機会や直接的に体験する場が無いなかで、興味・関心を高めてゆく、あるいは理科離れを防ぐ、などと大人たちは言いますけれど、一方で、そういうことができにくい環境に子どもたちは置かれてしまっています。そういったなかで、博物館の事業でどうやって子どもたちの興味・関心を呼び起こして裾野を広げ、お互いに合致した形で子どもたちの積極的な参加を促すのか。迷路の中で光を見出すような、なかなか難しい感じがしますけれども、基本的に子どもたちは、何か機会があれば学びたい、外に出たいし触れたい、というエネルギーの塊りでもあります。そこに触発するような、火を点けるような取り組みは絶対あると思うので、せっかく委員になったので、私なりに２年間しっかり頑張りたいと思います。

事務局　ご意見を伺って、こちらで、こういう人たちに来てもらいたいと募集する時に、その世代の方々の生活スタイルはどうなのかということを、我々ももう少し研究しないといけないのかなと感じました。例えば、小学校も高学年になると、あまり博物館に来なくなります。どういったことで忙しいのか、いつならば時間があるのか、そういったことを、ぜひまた、これからの協議会のなかで伺ってまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

議題(4)　その他

事務局により次回日程の調整。次回日程は 9 月 4 日(木)10 時開催を予定。

以　上

当日配布資料

平成２６年度第１回平塚市博物館協議会　次第

平成２６年５月２９日（木）
博　物　館　特　別　研　究　室

１　開会

２　職員、委員の紹介

３　会長及び副会長の選出

４　議事
（１）事業報告（春期特別展、こどもフェスタ２０１４等）
（２）今後の事業について
（３）博物館の課題（会員制行事のありかた）について
（４）その他

以　上

平成 25 年度春期特別展「水と生きる里　金目の風土とその魅力」開催報告

会　　期　平成２６年３月１５日（土）～５月１１日（日）

休館日：月曜日（５月５日は開館）

主　　旨　平塚市北西部に広がる金目地域は、多様な自然と、長い歴史を有している。また、この地域は実り豊かな農業地域でもあるが、これは地域の名を冠する金目川の恵みを受け、またはこれとの戦いのなかで先人が作ってきた特徴といえ、地域の自然もこの川に大きく規定されている。そこで、本特別展では、地域を理解する切り口のひとつとして金目川をはじめとする「水」に着目し、金目地域の個性、魅力を紹介していきたい。

また、本特別展は、エコミュージアム金目まるごと博物館と平塚市博物館の共同企画である。エコミュージアム金目まるごと博物館は、平成 19 年度の創立以来、地域の人々の手で、地域を調べ、学び、楽しみ、「まち」づくりをめざしてきた。本特別展は、これまでのエコミュージアム金目まるごと博物館の成果を活かし、地域の人々の手による地域の価値創造に向けた活動の契機にするとともに、地域の人々による「地元学」の実践例を提示することも目的とする。

展示構成　第 1 章　水と人との歴史／第 2 章　水をめぐる人の絆と知恵／第 3 章　水がつくる自然／第 4 章　水と土のめぐみ／第 5 章　水のある暮らし

展示点数　実物資料 71 点、写真パネル 166 点、図表パネル 27 点、模型 3 点

入館者

	入館者数			開館	こどもの	平均入館
	大人	こども	合計	日数	割合	者数/1 日
3 月	1598	417	2015	14	20.6%	143.9
4 月	2849	755	3604	26	20.9%	138.6
5 月	2404	1913	4317	11	44.3%	392.4
期間計	6851	3085	9936	51	31%	194.8
24 年度	7846	3576	11422	45	31.3%	253

天の川銀河へようこそ(3/16～5/6)

関連行事　特別展展示解説

①　3 月 15 日（土）　12 時 45 分～13 時 45 分　（参加 20 名）

②　5 月 6 日（火）　12 時 45 分～13 時 45 分　（参加 6 名）

特別展記念講演会「田園都市構想と民権」

3 月 22 日（土）　13 時 30 分～15 時　（参加 46 名）

金目ウォーク

3 月 29 日（土）　10 時～15 時　（参加 7 名）

特別展記念講演会「一枚の古文書から郷土史を読み解く」

4 月 5 日（土）　13 時 30 分～15 時　（参加 40 名）

金目の「食」を味わおう

4 月 12 日（土）　10 時～13 時　（参加 31 名）

生きもの観察会

4 月 20 日（日）　10 時～12 時（雨天中止）　（参加 23 名）

子ども自然観察クイズラリー

4 月 26 日（土）　10 時～12 時　（参加 84 名）

どんぐりクラフトづくり

5 月 6 日（火）10 時～12 時・13 時～15 時　（参加 282 名）

印　刷　物　図録「水と生きる里　金目の風土とその魅力」
A4 判　64 頁　カラー　1000 部　頒布価格 ¥1000
ポスター　B3 判　カラー　500 部
リーフレット　A4 判　カラー　2000 部

アンケートの結果

有 効 回 答 数　75 枚

回答者の住所　平塚市内 53、平塚市外神奈川県内 15、神奈川県外関東地方 4、関東地方以外 2

回 答 者 性 別　男 37、女 38、

回 答 者 年 齢

～19 歳	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代以上
16 名	4 名	4 名	6 名	7 名	17 名	21 名

情報の入手先　広報ひらつか 25 名、博物館のホームページ 4 名、新聞等 4 名、ポスター2 名、その他 33 名（複数回答あり）

お も し ろ さ

とても おもしろい	やや おもしろい	ふつう	やや つまらない	つまらない
40 名	23 名	11 名	0 名	0 名

総 合 評 価

とても良い	まあ良い	ふつう	もう少し	良くない
36 名	30 名	6 名	2 名	0 名

興味を持ったところ

- 水害の多い事
- 見近な川というだけだった金目川にも様々な人と歴史があるとわかった。
- 川べの野鳥！
- 金目地区の水に関すること
- 金目川の歴史（年表）蓑島画伯の絵　遺跡（入谷戸十六町）　炭火米　金目の名の由来
- 金目の食文化
- 講義がとても良かった　食事おいしかった
- 水がつくる自然
- 金目の食とてもおいしくいただきました。
- 金目川の用水路、一本橋
- 国民皆保険→水道の整備
- 水で病気にかかっていて水を変えたことや、昔の土器や貝がみつかったところ
- 蓑島画伯の絵　炭火米　用水路　土地改良　金目の名の由来　農家の食文化に
- 金目川の水源について、苦労されたこと。金目川の活用について
- 金目川の歴史、水害との闘い
- 金目川の水量があまりないのに各種の魚類が多くせいそくしていること
- 災害や地形の変化

- 川を中心とした生活風景
- おにぎりが炭になっていたところ
- いろいろな生き物がいて、きれいな水の大切さについて改めて感じた。手作りの地図がもらえるとうれしかった。細かくてとても楽しい地図でした。
- 自分の生れ育った場所を今迄良く知らず参考になりました
- どじょうをはじめて見ました
- いつも散歩する川辺の歴史を見ることが出来ました。平塚に住んで 15 年、増々平塚に愛着を覚えます。
- 金目川の生物　橋（一本橋、吾妻橋など）屋号
- 地域のくらし　金目エコの活動紹介
- 出土した焼きもの（薄い焼き上がり）　出土したおにぎりなど
- 金目地区の歴史に興味を持ちました。
- 金目の生物や歴史について
- 金目地区資源マップ
- 金目川の歴史や使われなくなった水門があることなど…。実際に魚を展示したのはイイアイデアだと思う。
- 徳川家康のお宝が実際に拝見できたのはとても面白いです。
- 金目川の由来が分った。昔からの洪水が興味あった。
- 岩石、川の流れ　立体地図
- 観音さま　お不動さま　・家康の茶わん

ご意見ご感想

- すごくよかった。たのしかったです！
- 歴史、自然（生物・地形など）、民俗の分野から、平塚の一農村を取り上げるという展示で非常に多くの発見がありました。自分も先祖代々金目地域に暮らしていますが、そういった地元の歴史等がこうして明らかにされ、改めて地元の土地を見直す機会にもなりました。知っている人の名前が各所にみられるのも地元ならではでした。私も今後はこのような「郷土」を再考させられるような企画を考えていきたいと思います。
  ※北金目にあった一本橋に「タコ橋」と名前がついていたような気がします。たしか私が小学生のころまで遊んでいた記憶が…
  巡回展で金目公民館あたりでも開催していただけたら、お年寄りが足を運べてまた様々な思い出話が聞けるのではないでしょうか？（貴重な資料は除いてパネル展でも既に企画済みだったら申し訳ありません）
- 小学生も少し興味が持てるような方法は出来ますか？水と生きる里ということで子どもの頃体験したことで下河原　海も遠かったので水遊びを通し先輩後輩の社交場でした。（新川広川）シジミがとれました。水がきれいでした。親水公園　芹・クレソンの宝庫、南金目たんぼ、ドジョウ・ウナギがいました。金旭中学校では自由な時間に金目がわをせき止め、魚とりをさせてくださいました。今でも懐かしい時間です。
- 金目（青柳）に 27 年間住んでいたので懐かしいかなと思ったのですが…主人が金目の生まれなので教えてあげたら私と違った思いがあるのではと思いました。
- 初めて博物館を訪問した。展示がとても充実していたので驚いた。
- エントランスの展示が良かった。（棚ドアの中の展示）又、昔の人々の暮らしの展示もしっかりしており、見応えあり。

- 平塚市には市の野鳥の冊子がありません。ぜひ「平塚にどんな野鳥がいるか、という本」作ってください。浜口先生のおひざもとなのに残念です。他市にはあります。野鳥の生活を書いた本はいつも利用しています。
- もうひとつ（強いてあげれば…）現在の地図と合わせてどこら辺りかが判れば楽しいかも。
- 金目という一地域で、よく調べ、発掘し、区分して、整理したものだと感服します。年月と労力の要る研究活動はしっかりしたリーダーとよき協力者がなければできませんが、この展覧会はそういう人に恵まれたことを示しています。敬服します。
- 数年前、金目エコを立ちあげる話をきいた時、無理だろうという人もいて大変なとり組みなのだと思いましたが、こんな立派な特別展をみることができ大変幸せな時がもてました。
- もっともっと何回も金目の交化を広めていきたい　春のなの花ににおいに川そでゆけば
- 母親の味を 60 年ぶりに味わいました　ありがとうございました（金目の「食」を味わおう）。
- 4/12　「金目の食」　ごちそうさま！一つ残らずお腹の中に…。　昔なつかしいおふくろの味を満喫しました。準備大変だったでしょうね。
- 又、他の地区のものも企画して下さい　楽しかったです　ありがとう
- 金目地区の活動に頭が下がります。見させていただきありがとうございました
- 地元の身近な歴史がわかり、大変参考になりました。
- 金目の食文化を平塚市民に伝えるためにも年 1 回の催しを実施したらよいと思います
- 平塚市内にこんな素晴しいところがあるなんて改めて発見させられました。皆さまのあたたかい心のこもったお料理　感激です。ごちそうさまでした
- とてもわかりやすかったです。
- 大変良くまとまり、わかりやすくて感心しました　しっかりしたリーダーと協力者でまとまりましたね
- 適所に、身障（腰痛等）のためイス等が設けられていればよいと思います。
- 年表の字が小さかったのが残念　老眼には辛い
- 冊子が欲しいです。　3/30（日）浜岳郷土史会で河口付近の散策をします。
- 標本やもけいがあるのは良かった。ホタルの幼虫を初めて見た。
- もうすこし魚を増やしてほしい。
- 東京の周辺にもいわゆる”里山”があったんだと驚きました。農家の方のお食事もおもしろかったです。
- 春嶽山に植林をしたみずほ小の卒業生です。現地のその後を見る機会もなかったので感慨深かったです。子どもの頃から親しんできた風景、くらしを見つめ直すことができました。
- 町を（郷土）大切に思う気持ちが、様々なところに感じられて好印象を持ちました。戦後の街づくりの様子も知りたいと思いました。
- ☆金目の「食」を味わおうに参加①漆田氏又里山の講演に感動、自然の恩恵を受け生活したことを思いおこしました。これからは維持管理は大変なことでしょうが、ご健康に十分気を付けられまして、里山の営みを続けてくださることをお願い致します。　☆ふっくら大豆の煮物旬のタケノコ、春の香りいっぱいの根三ツ葉、手間のかかるよもぎ団子とまさに大地の恵みを頂き、我が心身がめざめました。又同じ物を大勢で一緒に食する、最高の幸せでした。心よりお礼申し上げます。
- 特別展、良く見にくるけど何時も興味深く拝見している。作成する係員の方本当にご苦労様です。

博物館こどもフェスタ２０１４　結果報告

開催日：平成 26 年 5 月 6 日（火）

参加者数

イベント名	開催時間	子供	大人	合計	25 年度	24 年度
古代生活体験「火起こし」	10:00～12:00	91	80	171	281	260
洗濯板でお洗たく	10:00～12:00	51	27	78	78	—
縄ない体験	10:00～12:00	50	26	76	151	—
むかしのアイロン体験	13:00～15:00	29	17	46	51	—
むかしのこども遊び	13:00～15:00	100	50	150	289	512
はやしたいこ体験	14:00～16:30	50	5	55	—	—
民家で紙芝居	15:30～16:00	30	10	40	30	35
どんぐりクラフトづくり	10:00～12:00 13:00～15:00	162	120	282	—	—
鳥のステンシルカードで遊ぼう	13:00～16:00	51	29	80	—	—
おいしく学ぶキッチン火山実験	10:00～12:00	50	80	130	126	77
小さいけど偉大な プチ化石実物図鑑つくり	13:00～16:00	49	80	129	76	62
太陽黒点を見よう*2	10:00～12:00	79	89	168	183	60
プラネタリウム こどもフェスタ・スペシャル	10:00～10:30 11:00～11:30 13:00～13:30 14:00～14:30 15:00～15:30 16:00～16:30				418	—
博物館ぶたいうらたんけんツアー	11:00～11:30 14:30～15:00	15	20	35	62	52
こどもフェスタクイズ 2014	10:00～15:00	133	0	133	134	—
特別展展示解説	12:45～13:45	0	6	6	—	—
イベント参加者計		1106	817	1923	2067*1	1624*1
入館者計（受付）		486	310	796	901	738

*1 今年度実施していない行事参加者数も含むので、総計数は一致しない。
*2 水ロケットの打ち上げ実験も併せて実施。

開催状況と参加者動向

・すべての催しものを予定どおり実施することができた。
・参加者数は昨年度に比べてやや減少した。要因として、今年度は記者発表が直前となり、マスメディアへの露出が小さかったことが挙げられる。

アンケート集計結果

回収数　36 枚
・年齢：3 才～小学 6 年生
・性別：男子 13 名、女子 23 名
・過去の参加の有無：有 6 名、無 26 名、無記入 1 名（　昨年度：有 7 名、無 28 名、無記入 2 名）

イベントの名前	感想（かんそう）				
	おもしろかった	すこしおもしろかった	ふつう	すこしつまらなかった	つまらなかった
古代生活体験「火起こし」	11	0	0	0	0
洗濯板でお洗たく	4	0	3	0	0
縄ない体験	4	2	0	0	0
むかしのアイロン体験	2	2	0	0	0
むかしのこども遊び	12	1	1	0	0
はやしたいこ体験	3	0	0	0	0
民家で紙芝居	4	0	1	0	0
どんぐりクラフトづくり	10	3	1	0	0
鳥のステンシルカードで遊ぼう	4	0	1	0	0
おいしく学ぶキッチン火山実験	8	1	0	0	0
小さいけど偉大なプチ化石実物図鑑つくり	3	0	0	0	0
太陽黒点をみよう	2	2	3	0	0
プラネタリウム・こどもフェスタスペシャル	11	1	4	0	0
博物館ぶたいうらたんけんツアー	0	2	1	1	0
こどもフェスタクイズ 2014	21	3	3	1	0

○自由意見
・たのしかったです。（4 才・年中）
・もっといろいろやりたかったので日にちをのばしてください。（8 才・小 3）
・プラネタリウムが子どもむけすぎるし、うるさい（子ども｛小さな｝）もっと知りえないじょうほうをやってほしい。（12 才・小 6）
・親になり、子供の頃遊び場として来ていた場所に子供を連れてきました。当時と少し変わっていましたが、民家やじょう文時代の人形が好きでした。息子も楽しかったと、親子で GW を楽しくすごせました。ありがとうございました。（6 才・小 1）
・こんどはもっとはやくきます。ありがとうございました。（8 才・小 2）
・またきたいです。（10 才・小 5）
・たくさん遊べて、大人も勉強になりました。無料で助かります。ありがとうございました。
・ろけっとたのしかった。（5 才）
・みなさん親切に教えてくださり、楽しい時間を過ごせました。ありがとうございました。（小 1・6 才）
・またきます（5 才）
・初めて参加しました。すごくおもしろかったです。家族でみんなで楽しめた一日でした。クイズのプリントには名前を書いてもらったり、どんぐりアートでは、それぞれ個性的な作品が出来ました。又プラネタリウムは普段でも来たい、見せたいと思いました。来年も楽しみにしています。
・いろんなことが、わかったり、できたりしたからおもしろかったです。（7 才・小 2）
・すごくおもしろかった。すごかった。（10 才・小 5）

博物館夏期行事開催予定

夏期特別展　「ぼくたちはひとりぼっち？　～地球の外に生命を探して」概要

日　　程　平成２６年７月１９日（土）　～９月７日（日）

会　　場　特別展示室

展 示 概 要　私たちは未だ、地球以外に生命が存在する天体を知らない。しかし、昔から広い宇宙に同胞を求め想像力をはたらかせてきた。友好的か敵対的かを問わず地球外生命が描かれた SF 作品は数多く存在する。「我々はこの広い宇宙で孤独な存在なのか？」人類はそう問い続けてきたのである。

近年になって、その問いには文学でも宗教や哲学でもなく、科学が答えるようになってきた。半世紀ほど前から始まった宇宙開発競争、その延長線上にある惑星探査は、ひとつには地球の兄弟星である太陽系の天体に生命が存在しているか、かつて存在したか探ることを目的としていた。今から 20 年ほど前には太陽以外の恒星に惑星が公転していることが初めて明らかになり、その数は今や 1000 個を超えている。中には地球のように液体の水が存在し得る環境の惑星も見つかりつつある。

しかし、私たちは地球以外の生命を見たことがないのも事実である。他の天体に“生き物らしきもの”が見つかったとして、それが生命だと判断できるのか。それはすなわち「生命とは何か」という根源的な問いにもつながってくる。

本展示ではまず、身近な生き物から始まり地球には生命の多様性があふれていることを紹介しつつ、生命とは何か？を来館者に考えてもらう。その後、太陽系における生命探査や太陽系外惑星探査の最前線を紹介、あわせて人類がこれまで考えてきた地球外生命や、地球外生命との交信の試みを紹介する。最後に、宇宙での生命の可能性を来館者それぞれに考えてもらう。

展示の特徴

- 来館者にさまざまな問いかけを行い、その答えをその場で回収する（丸ラベルシールを用いた Yes/No 調査や付箋を用いた調査）。
- 解説パネルなどは小学校高学年以上（大人）を基準として作成するが、2012 年度秋期特別展（民俗担当）のように、章毎にキャラクターが会話をして展示内容を説明するパネルを用意し、小学校低学年にも対応する（図録も同様）。

主な展示と図録の内容（予定）

序：宇宙カレンダー（展示室前廊下）

→宇宙誕生から現在までを一年間に例え、年表形式で宇宙と生命の歴史を概観する。併せてそれぞれの時代の資料を可能な範囲で写真や実物資料で紹介する（斜面

台 or 平台を使用）

第一章：生命ってなんだろう？（外ケース）

→1. 多種多様な生き物たち

私たちの身の回りは生き物（生命）であふれていることを標本や写真で紹介

→2. これは生き物？

身近にある様々なもの（生物＝写真、無生物、中間のようなもの）を展示し、生命の条件を考えてもらう。記入台も設け、来館者の意見を次々に貼り出していく。

→3. 生命ってなんだ？

科学が考える生命の本質と定義を紹介する。

第二章：太陽系の生命（仮）

→1. 火星

→2. 氷衛星

→3. タイタン

それぞれの惑星探査の成果を資料やパネル、模型で紹介する。氷衛星はエウロパにエンセラドゥスを扱う

第三章　夜空の星に惑星を探す

→1. 惑星の見つけ方

系外惑星の検出方法を原理模型とパネルで説明。実際にその体験（アストロメトリとトランジット）は体験してもらう。

→2. 異形の惑星たち

現在発見されている惑星の多様性をパネルと PC システム（「天の川銀河へようこそ」と同システム）で紹介。

第四章　生命が生まれる条件

→1. 生命に必要なもの

生命が生きていくためには何が必要かを考えてもらう。記入台も設け、第一章の 2. 同様に来館者の意見を次々に貼り出していく。

→2. ハビタブル・ゾーン

生命に必須だと考えられている水が液体で存在できる条件としてのハビタブル・ゾーンを説明し、中心星の型によってハビタブル・ゾーンの位置が変化することを、装置を使って考えてもらう。

第五章　地球外生命を探す

→1. 人類が描いた地球外生命

これまでに人類が空想してきた地球外生命を SF などから紹介する。書籍やフィギ

ュアなども展示。

→2. 地球外生命を求めて

これまでに行われてきた科学的な地球外生命探査（SETI）を紹介する。展示ケース内に SETI@home を稼働させたままの PC を展示。

第六章　同胞へのメッセージ

→1. パイオニア・プレート

→2. ボイジャー・ゴールデン・レコード

→3. アレシボ・メッセージ

これまで人類が地球外生命へ向けて発信したメッセージを紹介する。特にボイジャー・レコードの中身は PC システムから聴けるようにする。

第七章　僕たちはひとりぼっち？

→1. ドレイク方程式

→2. 僕たちはこう考える

地球外生命の存在期待値を表す式（ドレイク方程式）を説明しつつ、資料でそれらを考えるヒントを与える。

かんたんなワークシートを用意し、選択式で来館者が自分の考える値を癒えていくと解けるようにし、その結果を、丸ラベルシールを用いて答えてもらい、来館者の考えた結果を合わせて展示する。

関連事業（案）

- プレイベント「地球外生命を描こう」7/5（土）15:30～
- 特別展展示解説（3 回）7/19（土）8/23（土）9/7（日）各 15:00～
- 連続講演会「いろいろな方法で探る系外惑星（仮）」

（全 3 回、日程・順番は一部未定）

1. 電波で視る　～ALMA が見つめる星と惑星の誕生

平松正顕 氏（国立天文台）　8 月 16 日（土）15:30～

2. 可視光で視る　～すばる望遠鏡が挑む系外惑星の直接撮像
3. コンピュータで作る　～ｼﾐｭﾚｰｼｮﾝで探る惑星の作り方

- 連続講座「アストロバイオロジー入門」（全 3 回　講師は 3 回とも塚田が担当）

1. アストロバイオロジーってなんだ？　7/27（日）15:30～
2. 太陽系に生命を探る　8/2（土）15:30～
3. 太陽系外に惑星を探す　8/3（日）15:30～

- 体験学習「生命の元・DNA を取り出そう」7/29（火）、8/15（金）13:30～
- 雑貨団シアトリカル・プラネタリウム　8/29（金）14:30～、18:30～

平成２６年度　文化ゾーン３館コラボ事業概要

名　　称　「夏休みに美術館・博物館・図書館をめぐろう！スタンプラリー（仮）」

実施期間　平成２６年７月１９日（土）～８月３１日（日）

※美術館のブラティスラヴァ世界絵本原画展の実施期間に合わせる

事業内容　美術館：「ブラティスラヴァ世界絵本原画展（絵本をめぐる世界の旅）」

博物館：「僕たちはひとりぼっち？～地球の外に生命を探して」

星と宇宙の絵本の展示

図書館：絵本原画展に関連する絵本の展示とおはなし会

星などに関連する本の展示

スタンプ　４分割のデザインのスタンプを作成

※３つのスタンプを集めると１つの絵となる。それが記念品となる。

博物館企画「絵本で読む宇宙」

概　　要　美術館の夏期特別展と連動し、天文ならびに関連する科学系の絵本を展示、来館者が自由に閲覧できるようにする。併せて関連行事を行う。

期　　間　7 月 24 日（木）～8 月 31 日（日）

場　　所　博物館 1 階　相模の家　及び　寄贈品コーナーの前

方　　法　民家横等に長机を出し、ブックスタンドで絵本の一部を並べて展示する。またその他多数の絵本はブックエンド等に並べ、閲覧できるようにする。

稀少本以外は閲覧可とし、寄贈品コーナーの前（民家横）にベンチを並べ、そこでのみ閲覧できるようにする。原則、来館者を信じ、盗難防止用のワイヤーなどは取り付けないが、寄贈品コーナーに設置してある監視カメラの位置を変え、展示スペースを撮影できるようにする。本をていねいに取り扱ってもらうよう掲示を出す。

オススメの天文絵本のリストを作成、自由配布する。

関連行事　天文絵本の読み聞かせ＋簡単な工作（or Mitaka を利用した宇宙のお話）

日時：7/24、7/31、8/7、8/14、8/21、8/28 の各木曜日、午後 1 時～1 時 30 分

場所：博物館 1 階　相模の家（ろばたばなしのときのように民家に上がる）

方法：絵本の読み聞かせ 10 分＋それに関連する簡単な工作 or Mitaka などで宇宙のお話

宇宙のお話のときは自立式スクリーンとプロジェクターを民家に設置

参加：自由参加

・工作でない場合は途中参加もあり

・工作の場合は定員 15 名先着順（整理券を配る？要検討）

内容案：『ぼくのいまいるところ（かこさとし）』＋Mitaka 宇宙旅行

『星と星座をみつけよう（森雅之）』＋星座早見盤工作　　など

平成 26 年　夏の行事予定

事業名（講座等名）	実施日	内　　容	募集人員	参加費
星を見る会	7 月 24 日 8 月 2 日、21 日	望遠鏡で、その日に見える月や惑星、季節の星を観察します。	定員なし	無料
体験学習 「縄文人になろう」	7 月 27 日	火起こしや弓矢の体験を通して、縄文人の技に迫ります。	20 人	無料
体験学習 「DNA を取り出そう」	7 月 29 日 8 月 15 日	かんたんな実験で生命の設計図である DNA を取り出します。	20 名	無料
自然観察入門講座 「貝化石を調べよう」	7 月 24 日	大磯海岸で地層や貝化石を調べ、大地の生い立ちを学びます。	30 名	無料
体験学習「地形模型を作ろう」	8 月 20 日～21 日	厚紙を切り抜いて積み重ね、地形模型を作ります。	20 名	1,800 円
夏の自然観察さんぽ会	8 月 2 日	博物館周辺の生きものを観察します。	定員なし	無料
寄贈品コーナー 「天体観察会 30 年」　6 月 14 日～7 月 13 日　天文 「平塚空襲（仮）」　7 月 16 日～8 月 17 日　歴史 「平塚の緑釉陶器」　8 月 21 日～9 月 3 日　考古				

教育普及活動の新たなコアメンバー獲得に向けた対策について

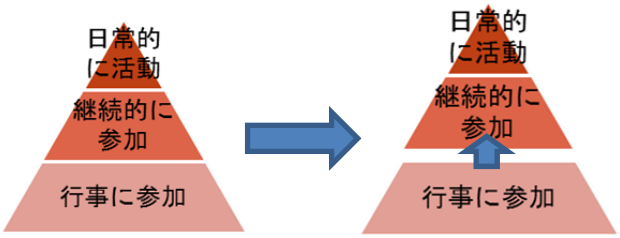
～行事編成の量的コントロールの実施について～

●現状についての認識

平塚市博物館の従来の活動は、市民とともに調べ、集め、保存して、展示等普及活動を行うスタイルによって推進してきました。年間会員制の行事がそうした活動の軸となっています。行事の会員市民の存在が博物館をここまで支え、育ててきたといえます。ところが近年、各部門において、活動を支える市民スタッフの高齢化が課題として挙げられています。各会の会員が固定メンバーのまま徐々に高齢化し、将来にわたる博物館活動維持の不安要素となっています。

もちろん、メンバーの固定化は、その知識技術の高度化を狙いとして本来意図されたものです。それ自体を一概に悪い傾向とみなすべきではありません。しかし安定した館運営のためには、サポート人材に適度なリサイクルを生むため、この時期に方法を確立して行く必要があります。

●行事のタイプ分類（現況検証の視点）

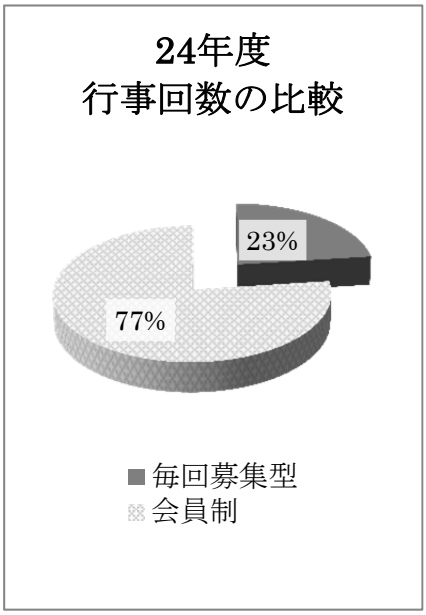


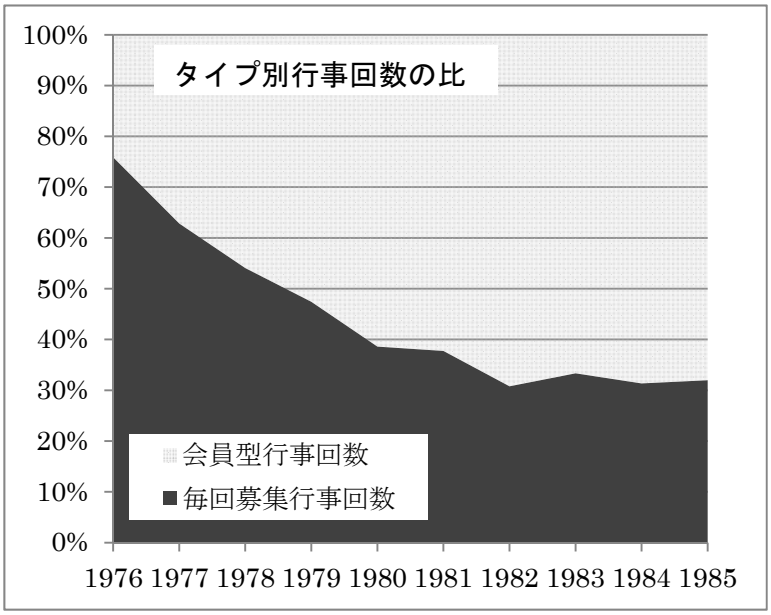
平塚市博物館の会員制行事は、一回ごとに参加者を募る行事（以後仮に毎回募集型と呼ぶ）に対し、参加者の成熟度に合わせ、行事編成を階層化したものです。その概念を、参加者の博物館との関わりの深さを上下として右図に示します。ピラミッド型の、上の層の三角が「会員制行事」の構成市民です（ピラミッドの下には、プラネタリウムや展示見学のみの利用者が存在する）。

この構成概念では、毎回募集型行事の参加者が、会員制行事参加者の供給源となるべきですので、ふたつの行事タイプに分け、最近の実施状況を検証すると、次に述べる傾向が見られました。

●毎回募集型（自由参加を含む）と会員制行事の比率の傾向

回数で比較する（全行事の実施合計回数を 100%とする）。





24 年度に実施した平塚市博物館の行事の回数をカウントすると、77%が会員制行事でした。

右側のグラフは、開館から 10 年間の行事実施回数です。博物館開館後、会員制行事の回数比率が上昇し、1980 年ころには、現在の「行事を調査研究の機会とする」システムが出来上がったことがうかがえます。しかしその当時でも、会員制の比率は 70%程度で、現在（77%）までにさらに増加していることがわかります。反対に、毎回参加型の比率は減少しているわけです。

●解釈と対策の方針

①会員制行事増加により調査研究収集データを教育普及活動と同時に蓄積できましたが、現状は、会員制行事数に比して、その入門的役割を果たすべき行事の比率が著しく低い状態になっています。会員制行事への応募機会は年に一度に限られるため、比率の偏りは、博物館行事に参加する機会の減少にもつながります。

会員制行事の会員増を図るには、ふたつのタイプの実施比率を適正化する必要があります。

②また、データ以外の面で、知識技術面、人間関係面ともに成熟した状態にあるコミュニティへの気後れから、会員制行事の新規参加者が増加しないとも考えられます。

新たに会員制行事を始めた場合には、新たに博物館と関わる人材の参加が期待できます。

●行事編成の目標の設定（めざすべき状態）

以上から、次のような目標を設定し、学芸担当の会議で提案しました。

・博物館行事全体の中で、参加者を毎回募集する行事・新たに実施する会員制行事の回数の合計が、全行事回数の 30%以上となる

・同じく参加者数が、全行事の 50%以上を占める

・博物館の行事に参加してみたくなった時に、何かしら受け皿が用意されている
（行事の実施時期、分野がある程度分散している）

・目標全体の達成時期は 27～28 年度とし、その間、目標の妥当性について検討を続ける。

●備考（本対策に不足する要素）

・行事の質的な検討

・ターゲットとする世代
・実施時期、季節、曜日、時間帯、インターバル
・行事内容、テーマ

分野ごとの差異に応じて

８～９月の学芸会議で今年度新規に開始した行事での効果を評価し、再検討した上で、27 年度事業編成における指針にしたいと考えています。

これは、教育普及活動への対策ですが、他方、調査研究に対しては、一時的に制約として機能してしまう可能性があります。そこで、これらについて、この場で忌憚なきご意見を求めるものです。

どうぞよろしくお願いいたします。